叔母は十向部屋から出て來ない。婆やゞの話ももう一時間近くなつた。あまり時間が立つと、天氣も變だし、先で困るからと思つて、用意をしてしまつてから奥へ立つた。襖を開けると叔母は小さな紫檀の机に倚れて、何故となく書もかけては止め書きかけてはやめ、もう七八枚切り端が出來て居る。筆蹟はどれも見事だが文句は皆きれ〳〵でまるで纏まつて居ない。私はその内に時候の挨拶だけ書いたので一寸治りがついたのがあつたのでそれを取つて、これでよろしいと言つて叔母に見せた。叔母は物足らぬ顔して筆を措いた。

門で別れる時に、

「叔母さん、さよなら、またすぐ來ますよ」

と言ふと、叔母はしをれて小聲に何かつぶやいた。

行く事二町にしてにして雨がザーッと降つて來た。ふり返るともう家も見えない。

私は叔母さんの命がもう永くないやうな氣がしてならない、そしてそのときにはなきがらは山吹の池のあたりへ葬つて奇麗な石を立てたいものだと思つた。

「温泉まで」

天　行　生

八月の熱苦しい夏を、山間の涼しい温泉に今年も暮さうと田川は一人博多から上り列車に乗つた。

城山の隧道を出ると、四邊は次第に灰暗い闇に包まれて月は雲に蔽はれて居るのが見えない、枝光の鐵工所では無數の巨大な煙筒が闇に聳えて、出切れない程の煤煙が眞黑く渦を卷いて、あたりの天に漲つて居る、幾千の電光が惡魔の睫のように耿々と光つて、其影から地軸を搖がせる恐ろしい響が天にどつと響く幾萬の勞働者が直ぐ胸に彫み出される、あの黑い煙、あの恐ろしい響みなこれ人の膏と汁で凝つたものではないないか、こんな形になりて天に漲り地に響くまでにはあらゆる芝居が演ぜられて居る、そしていつまでも〳〵此芝居が續くのであろう。

『芝居』――あゝ自分も此芝居の中に奔弄されて逃るゝ途が無いものではないか――ハーマートンが恁那ことをいつてる、『……斯かる大切な勞働に人の一生を吸集さるゝに一つ異論がある、人生は一日の日を送る如く、多くの日子の連續に外ならない一生も夢のように流れる、勞働者は彼の仕事の外には何事についても考へない、少くとも彼等は晩年に至り俄に自己の年老いたるに氣がつく、そして、何故自分はも少し人生を永く見ねしめなかつたかと驚く……』。そうだ〳〵生活のために塵烟に燻ぶつて汗水を流して自己を冷靜に考ゆる暇のない間が人間は所謂享樂の世界にあるのかも知れない。去年春より夏にかけての大病――六十日間の大熱一日として退かない、身体四肢の自由を失つて臺北醫院に呻吟する事六ヶ月、体量は八貫目迄も減じ、醫者が死の宣告を與へたのも再三でない、氷丈けでも數萬數千片を消費した――此大病は實際悲慘なものであつた、が其後の數年間――なほ此後も？――は冬枯の荒寥たる野に一人棄てられたようで、更に更に悲慘苦惱の月日ではなかつたろうか。母と妹さには、

『此夏もT温泉と靜養してきます』。といつて來たが自分は慈悲深い老母と親切にして呉れる妹にも飽いて

丁度傷いた狸が身体谷まつて土の中に頭を突き込んで暫くの慰安の場所を得たと思つて居るそれのように自分は何處か半日でも一日でも慰安の匿場が欲しさに、恁うして飛び出して來たのである。

自分は恁んな深い追憶から急に覺めた時には汽車は海岸を走つて居た、黝い山が朧に輪郭をあらはして左手の窓から見ゆる、やがて馬關の街の灯や淀泊せる汽船の電燈が蛇の舌のように海に流れてゆら〳〵する、乘客は皆降りる用意をした。

自分は門司につくや人々の間を縫うて、からころいふ雜然たるプラットホームの足音を後にして急いで出口を出た。

連絡船に移つて涼しい風に顏を向けてほつと溜息をついた。

馬關を夜の十一時に發車した。三等室は休暇で歸鄕する佐世保の水兵かぶつすり詰まつてゐた、自分はある水兵の側に掛けた、が暫くは艶めかしい賑かな話で前後左右持切つてゐた、夜が更けるにつれて、車内は靜穩に返り、汽笛が折々闇の中に響く、隧道に入るたび何か重苦しい物を胸板に置かるゝように感じた。

頭が混沌として勞れ果てゝ居り乍らも睡れない。

二

夜あけに宮嶋の驛に着いた。

水兵の大半はもう減つてゐた。自分は廣嶋迄と云つてた隣の水兵に會釋して、こゝで降りた、連絡船で眠さうな顏をした四五十人の乘客と共に嚴島に渡つた、顏を洗はないのと朝飯を食はないせいでもあろう、何か物足りない寂しさが心に浮ぶ。

寫眞や繪葉書で見た鳥居が砂の中に立つて居る、美しい朝日が翠色滴らんとする山かげから顔を出すと、海の面に映帶し、微風漣漪を織りなして繪のようだ。鬱樹の間に高くつき立つてる朱塗碧欄がてう〳〵と照されて居る、堂を護る落々たる長松の間に鹿が餌を求めて居る、美しい品のよい女が二人で眺めてる樣がまく畫題に選ばるゝのだなあと想ふ。

案内料とか、燈明代とか、寶物拜觀料とかで法外の金をとられて不快の念がむら〳〵と勃る、もう何もかも興が覺めた。

五十計りの小倉の袴をはいた親爺の後から役目を早く果したい時のような考で、すん〳〵附いて廻つた、本氣で拜みもしなかつた。

堂脊の山に登つて遠く近く眺むる高樹の梢や環舞せる鳶の脊が見ゆる、紅葉谷の幽邃も見棄てたものでは無かつた。

目が自分は何だか氣が進まない、周圍の萬物が自分を美しい眩しい看板に亡心さして薄暗い樂屋に伴れ込み、スポ裸にして闇の中にたゝき放すように想はれてならぬ、冷たきうな淨い水の岩間を流れてるのを見てゐると岩がすき徹つて見ゆるような氣がして、氷のように冷たいある恐しいものが恁う言うた。

『此世は凡て自分勝手なものゝ集合である、誘惑はあらゆるものに紛裝して人を弄んで居る……』

自分は急いで嚴島を去つた。

自小郡驛まで切符を買つた、再び昨夜來た方へ戻るのである、自分はわざ〳〵嚴島を見物に來たのだが莫迦らしくてたまらぬ。午前十時半頃朝飯と晝飯とを兼ねた積りで辨當を買うて食つた、そして闇も無く窓に倚

つて眠り初めた、滿腹して睡る位氣持のよい事はない。

きうざらしい人聲に不圖眼を覺した、汽車は今何處を走つて居るのか知らない、自分が前には廿四五の若いハイカラな脊廣服の色の白い男が辨當を食ぴやめて、伸び上つて自分の頭の上を越ゑて後の方を視詰めて居る、自分も振り返つた。

『失敬な…失敬なつ』といふ聲が連いて起る。

周圍の人が五六人起つて覗き込んで居るため何か解らない、暫くして再び其方を視ると、周圍の人が落ちついて變な顏をして居る、五十計りの浴衣に紹の夏羽織を着た髯の黑い男が罵るのであつた、そして其男の正面に腰掛けて居る男は顏は見ぬが年は六十位だろう、藥鑵頭をぺこ／＼何遍も下けて居る言葉は何を言つてるのかさつ張り解らなかつた。

眞相は恁うであつた。

髯が居眠りしてるのに、藥鑵頭が懷中に手を入れかけたといふのであつた。

それと知つた時自分は蹙めた、そして强いて窓から移り行く青い田面が照されて居るのを見た、石灰を入る〻白い煙がいかにも熱さうに思はれた。

藥鑵はある小さな驛でぷいと下車した。

『此次の三田尻迄往つたら警官に渡すのであつたが。』と髯がいかにも殘念さうに呟いた、誰に云ふともなしに。

あの人生の奮鬪につかれた藥鑵爺、何と淺間しいことを敢てするのだろう、人の金が欲しいのか、人のも

のを盗まなきや生活して行けないのか、食へないのか、あゝ盗む丈けの勇氣があつたら短い餘命を食はずに死んだらいゝではないか、『自分勝手』なといふ印象が再び眼の前にぶら下つて現れる、そして、老人—赤着物—獄裡の黑い高い門—墓場、を連結して考へずには居られなかつた、いゝ知れぬ悲哀と寂寞と恐怖とが悚然として身に逼つてくる、

小郡から輕鐵に移つて日も暮れ〳〵に山口についた。其夜は山口に宿つた、風音のもの凄い暗い夜であつた。

三

翌朝になると空がどんより曇つて小雨さへ降る、萩に通ふ馬車があるが、二時間も待たねばならぬから歩む事にした、荷物は先きに送つてあるし馬車に鮨詰めにさるゝより餘つ程增しであると思つた。

旅をすれば誰しも見る、石ごろ川が流れて、それに覺束ない土橋が架り、山が逼つて其麓に二三軒づゝ家が段をなして散在し、水車が悠長な音をたてゝ廻ぐつて居る、恁那田舍路を暫く行くと迂曲々々つた山路にさしかゝる、途中草を苅つて歸る百姓に何遍も〳〵も逢うたが旅人らしい者は一人も見なかつた。

蓊勃たる烟霧四山を包み遠く南溟を望んでも濛々漠々。

自分は過去のわが回想を擅にして、面を掠めて連れる急坂層々の登り坂を辿つた。

僕が故郷の中學校を了へて家に母と幼い妹とを殘して臺灣の叔父を倚つて行たのは九年の昔になる、丁度花の如き空想に燃ゆる廿才の春であつた。父は僕が七才の時に亡くなつたので何も確然と覺えぬ、あとに殘

つたのは母と僕等兄弟三人、兄は自分より三四年早くより叔父の下に働いてゐたが、叔母(叔父の妻)と、どうしても氷炭相容れず其後獨立の行動を採つた、其時以來今日迄叔父と兄との間は不和である、自分は叔父に對しては學資を貢いで呉れた恩人であるから、叔母の仕むけが氣に入らぬ事もたび〳〵ではあつたが他人でさへ感心する程耐へ〳〵て服從してきた、其七年間といふものは蕃界深くにやられ恐ろしい生蕃人を相手に物品の交換事業に從事した。叔父は大病にかゝる前後から自分に妻帶をすゝめた、それは叔母の從妹に當る女であつた。兄は大に之に反對して自分の味方から妻を是非とすゝめた。板ばさみになつた自分は『自分勝手な云分だ』と思つた。それから後は此話が持上る毎に僕は僕の體が益々自由を失ひつゝある事を自覺した。

『俺を自分自分の廐に繫がうとしてるのだ。』と心に叫びながら一道の血路を求めようと決心した。

はしなく一昨年大病にかゝつて九死に一生を得て辛じて靜養に歸鄉する時、僕は『此機逸す可らず斷然再び臺灣の土を踏まざるべし、吾は吾が自由のために』と心に誓つて久し振りに懷かしい故鄉に歸つた、待つて居た母が、

『よう生きて歸つて呉れた。』といつて潸々と泣いて呉れた、僕は七年間の膏血が空しく氷囊の中で水泡と消えてしまつた墓ない自分を省み、痩せて細い手首を凝視して、血管猶ほ赤いものが流れて居るかを疑つた、頭がぐら〳〵として眼が眩惑した。

去年の夏は卽ち病後の靜養入湯のため溫泉に思出多い九十日の日子を送つたのである。

『こんな涼しいところに何時迄も居たいわネー』と靜江さんは截然直瀉水に激して怒號珠を吐き、澎湃霧の如き飛沫を心地もさうに浴び乍ら瀧坪の淵の大きな石に倚りかゝつて其兄を省みた。

『居たけりや冬迄も居たら氷のように冷めたくなつて來年から暑い／＼といはないでいゝだろう』と兄は笑ひ乍ら僕の方に向いて同意を求めるように云つた。僕は只

『ハ、ハ、ハ』と輕く笑つたが恐らく韃々たる響で靜江さんには聞に無つたであろう、

『兄さんは何時も理窟計り云つて……』。あとは聞になかつた。

『靜江さん、而し此瀧は上坪溪流のあの瀧より、餘程水量も景致も拙劣ますようですね』、僕は靜江さんと共に嘗てよく遊んだ、異鄉蕃界のその瀧が強いて比較に引きたくて堪らなかつた。

『妾、瞭然は記憶に殘つて居ないのですけれども……貴下によく釣に伴れて頂いたことがありましたね』

『はああの頃はよく呑氣な遊びもしましたつけ』

『あなた妾の歸つて後も毎日お出でになつたでせう』

『時々忍耐力の修養にと思つて參りました、併しいつもあるものが欠げてる樣な氣がして、淋しくつて止してしまいました』、會話は暫く途切れた。

僕は乱岩巨石の間を求めて泡立つて潺々と流れてゆく水に眼を反した。

靜江さんの兄さんは下駄を脱ぎすてゝじゃぼ／＼水に這入つて度の強い近眼鏡を透して奇形の石を探して居る、

『でも今日は釣針を持つて來るところでした』。靜江さんは話が沈みかけたのを轉ぜようと思つたらしい。併

し駄目であつた。

『いゝ僕は此手ぢやとても……元來上手でもないが……』

語尾は瞭然しなかつた、そして右の肱を差出して大事そうに見廻した。自分は去年の夏は病後右肱の屈曲の自由を失つてゐたのである。

『あゝさうでしたとも、妾つい何も彼も忘れて、而し今といはず來年の夏迄には立派に療つて頂いて、あの[illegible]た手腕が見たうムいますよ』

『身体が恢復し、此肱が癒つて恁んな處に悠々遊んで居らるゝものですか、僕は再び衣食のために奮鬪せねばならぬ運命を持つて居る。』と、言ひたかつたが、ぐつと喉で止めて、

『あなたは來年の夏もこいでになりますか。』

『いゝ兄に願つて此度は母も一緒に是非來たいと存じてゐります……あなたも是非ね、母がどんなに喜びませうか』

『貴下方御兄妹は實に幸福で羨しい……私などは今から更めて人生の獨り旅に出なけやならないのです』

三人はT温泉迄一里計りの薄暮の石ごろ路を歸つた。

四

自分は飛沫のような雨の中をあるいて居る。

あゝあの靜江君等の兄妹は、また今年もT温泉に來てるのだらうか？　靜江さんについて回想せざるを得

なかつた。

自分は今から九年前から昨年の初迄七年間蕃界の生活をしてゐた、僕は叔父の換蕃所に俗界を絶ちて、云へば如何にも詩的であるが實は鬼界に淋しく暮して居た。換蕃所に隣して警察の支部が置かれてあつた、警部が一名巡査が五六名も居た、其内二三人は妻子をつれて小屋のような官舎に住んで居た。それで蕃界、云つても一小天地をなしてゐた。

静江さんは其警部藤井某の愛嬢であつた、家族は母を合せて三人切りで静江さんには國に兄があるとい、事を聞いてゐた、――その兄さんが昨年夏T温泉で初めて會つたのだ――

静江さんは其頃よく他の巡査の子と自分の換蕃所に遊びに來たものだ、まだ九ッか十の色の白い、頑是ない愛くるしい、振分髪の娘であつた、僕は鬼界の山中で此等無邪氣な子供を相手に小波のれ伽噺の本を讀んで聞かしたり、バナマの實を分けて食つたりしてゐた。生蕃との交換の暇には四五町を離てゝ轟々の響ある坪溪の瀧壺に遊んだり、其附近に釣に伴れて往づたりして淋しき月日を樂しく送つた事がある。僕が蕃界に行つた時初めの程は生蕃の言葉が解らない、あいにく番頭が居ない時には、少さい花のような静ちやんが通譯をして呉れた。

『静ちやん此生蕃は何と言つてますか』ときくと。

『田川さんは大きくつて未だ蕃語を覺えないの、――』「又來る時に何か持てくる……酒を一杯飲ましてくれといふのよ』と笑つた。

恁那風で僕は虫から静ちやんが好きだつた。又静ちやんも人一倍自分に懐いてゐたと思う?。

生蕃!!あゝ人の血をすゝるといふ生蕃實に殘忍な輩である、其頃彼等は出草と云つて時々歸順誓約を無視して夜中に蕃刀と鐵砲と首袋とを持つて胡椒を嚙み乍ら山から首取りに出て來る。時には二人時には三四人。

ある夜半に突然ぱり〳〵音たてゝ向ふの土人家屋が燃え上る、悲鳴をあけて中から一人二人飛び出す、砲聲がズドン〳〵と眞夜中に響く陰から蕃人が馳せよつて蕃刀で首を打ち切る。事はもう終つたのである。蕃人は凱歌をとなへて猿の如く山に逃げ込む、月の光が凄愴、青く輝いて瀧の響が慓ねて聞ゆる。

あゝ恐ろしい!!動氣か高くなつた呼吸が塞がつたようだと、毛布にもぐり込むと、枕頭に醒い血潮したゝる首を三つも四つも下げて蕃人が立つて居るように思はれて、顔を出すこともみじろぐ事も出來ない。恐ろしい一夜が五年も十年ものような感がして、とう〳〵夜が明ける恁んな事が再三あつた。

そこで巡査も吾々も、朝は日が出なけりや起き出ない、夜は日が入らぬ内に燈を滅して寢につく習慣であつた。

一朝悲報が比蕃界の小天地に傳つた。

藤井警部が昨夜隘勇一名とJK街の支廳よりの歸途蕃人のために慘殺されたといふ事である。

静ちやんは狂氣の如く父を慕うて泣いた、而し首を蕃人に取られてゐて其死顔に接する事も出來なかつた。

僕は此悲愴悽絶なる運命を有した母子を思うて泣いた。

僕は遺骨を抱いて故郷に歸國する二人をJK街迄送つた、途に其殺された場所を通つた時僕は四肢が大理石のように頑くなつて動かなかつた。

母子は此時山口縣のある田舍に歸鄕した切り杏として消息はなかつた。

五

三四里の峠道、人といふものに逢つたように覺えぬ、無論道伴れも無かつた、重くるしいいやな雨がやんで雲の切目から光線がさす、而し空氣は依然濕つて、しと〳〵する浴衣か干く迄には至らなかつた。

蝙蝠傘で地を堀り乍ら峠の茶屋に腰かけて舊藩の時の櫻の茶屋の由來をも聞いた、谷を見下すと薄が雨を帶びて重く見ゆる。麓の茶屋についた時下駄のはな緒が切れた、自分は急に氣が挫けて茶屋に入つて三人の水兵と共に晝飯をかき込んだ。

萩迄三里の坦道と聞いた、茶屋を出て四五町行くと田舍町がある、馬車の立替場に腰を卸した時は、心も身もうんざり勞れ切つて居た。

馬車の中には、品のよい六十計りの親爺夫婦が乘つて居た。汗ばんだ襟の中から時々道の曲り目等で御馬臺から下りて喘ぎ〳〵走る馬丁を見た。そしてぼんやりと獨りとりとめもなく獨立の生活といふ事を考ゆると混沌として行手は闇のようである、――もう叔父とも兄とも關係を切らう、いや此方から切るのでは無くて、近頃は全く向うから絶縁も同樣である、嚴島で紅葉谷を見た時の感が繰り返さるゝ、――不意に此年は廿九才であるといふ事に氣がつく、人生の大半は無意味に過されて此馬車は老夫婦と一緒に墓場の穴へつれて行くのではあるまいかと思はるゝ。

否々僕が僕の運命を開拓するのは是からである。孔子は三十にして立つと言つて居られる、――自分が今二度目の溫泉行きは大に意味がある、去年は病後の肉体を靜養に行いたのだが、今年は精神の傷を癒しに行

くのである、運命開拓の作戰計畫に來たのである、實際自分は病みて初めて眞の自己、赤裸々の自己を知る事が出來た病は運命の一大轉機であつたのである、あゝもう自分は悲觀はすまい。たとへ臺灣に行かなくとも天は高くして鳥の飛ぶに任せ、海は濶くして魚の躍るに從はせて居る南洋もあるではないか、と氣をとなほすと馬車が勇ましく光明の中を急ぐのであると考へらるゝ。あゝ自分は愉快でたまらぬ、今夜荻に一泊すれば翌日の十時頃には、あの思出多い瀧の淵を通る。

靜江君等はもうT温泉に來て居るだろうか？……否々屹度來て居るに違いない。そうしてあの瀧のところまで兄妹で迎に來て居るような氣がしてならぬ。

いつの間にか靜江さんのやさしい顏がくつきりと頭腦に浮ぶ。（完）

（十月三十一日稿）

薩游稿

舊雜誌部長　稼堂黑本植

余乙未歲八月、歸省、患眼、歲抄少間、乃以冬暇爲麗洲之行、欲以山水爲陳檄也、時學生田千里請同遊、諾、十二月廿九日發、日數一周日、里程五十里、至丙申歲王月五日而歸、余遊麗洲、此行爲始、耳目所觸、有新知想、然余廢筆硯既久矣、故文思空疎、氣亦不振、故此行素無意於吐屬也、且薩南之山、火國之水、山陽賴氏賦詠殆盡、不復須余言矣、而田生出一部含英、搆思不已、余見之、宿癖忽動、乃直攄胸臆、咄嗟成篇、以畧記鴻爪之所印焉耳、稼堂野客識、

發白川寓